

再試合は花北青雲

久慈に6-3 5回に集中打

第94回全国高校野球選手権岩手大会は14日、久慈と花北青雲の引き分け再試合があり、花北青雲が久慈を6-3で下した。15日は真営、花巻、森山の3球場で再試合が行われ、8強が決まる。

◇県営	000 000 111 3
▽3回戦	000 000 111 3
久花	100 050 00x 6

ぎのうの勝敗

◇県営	6-3	久慈
▽3回戦		
花北青雲		

きょうの試合 左が一塁側

◇県営	野 (9時)
▽4回戦	
盛岡大付一	盛岡中央一関学院 (11時30分)
花巻東一伊保内 (14時)	
◇花巻	東 (9時)
▽4回戦	
不来方一	大槌一花北青雲 (11時30分)
大	盛岡四一住田 (14時)
◇森山総合公園	
▽4回戦	
大船渡一	大船渡一関工 (10時)
水	沢一大船渡東 (12時30分)

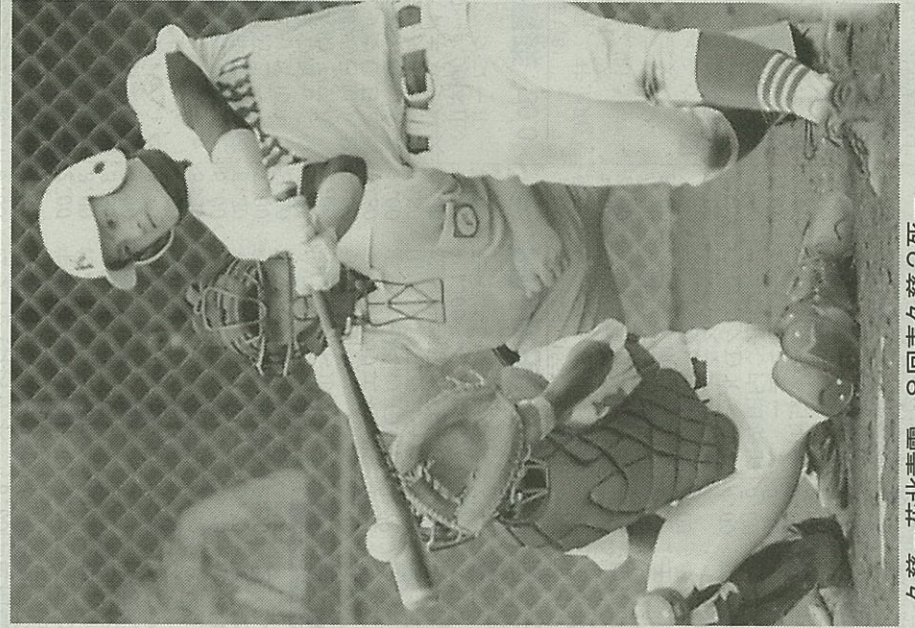
第94回 全国高校野球選手権 岩手大会

主催/朝日新聞社・県高野連

「打って勝つ」貫いた王道 久慈

「適時打を打てるチーム。それがこの夏に向けた久慈の目標だった。昨夏、8強をかけた大船渡戦。再三、得点圏に走者を進めながら、残塁もを記録して敗退した。「どんなチームにしたいか」。昨秋のチーム発足時、君ヶ洞卓朗監督の問いかけに、選手たちの答えは明確だった。「適時打を打って点を取る、打ち勝つチームになりたい」。バント練習の時間を削り、冬は毎日1人約2千回、バットを振った。

再試合となった14日の3回戦。6点を追う7回表、無死二、三塁で中花光汰(2年)に打順が回った。スクイズでも得点できる場面。だが、中花の頭に浮かぶのは浜端航大主将(3年)の言葉だった。「自分たちはタイムリーで(点を)かえさないといけない」。監督からもスクイズ



久慈一花北青雲 8回表久慈2死一、二塁、中花が左前適時打を放つ＝県営

一転、変化球で要所突く

2012 夏

6回、花北青雲の先発晴山(2年)は、四球と安打で走者を背負った。無死一、二塁。だが、晴山にあせりはなかった。「力でねじ伏せる」

その思い通り、続く久慈の4番五市紳(3年)を速球で詰まらせてファウルフライに打ち取る。後続の2人には一転、スライターの打たせてピンチを乗り切った。

延長15回で決着がつかなかった前日の試合。晴山は直球を主体に投球を組み立てた。だが、再試合となっ

たこの日は、要所で低めにスライターを集めた。直球とスライターの、晴山の決め球。それだけに、リードする捕手の伊藤大樹(3年)は「いけるところまで速い直球とスライターはあまり使いたくない」と考えていた。早い回で打たれると、投球の組み立てが難しくなるからだ。だが沢

田靖永監督は「ここまで来たら隠すものはお互いなし」とグラウンドに送り出した。久慈の君ヶ洞卓朗監督は「昨日の晴山君の直球の弾道が(久慈の選手たちの頭)に残っていて、消しきれなかった」と唇をかむ。久慈の主将浜端航大(3年)は「昨日と違って、ス

ライター中心に攻めてきた。低めのスライターを見極めていこうと話していたが、思ったより切れて、直球も気がこもっていて、振らされてしまった」と舌を巻いた。

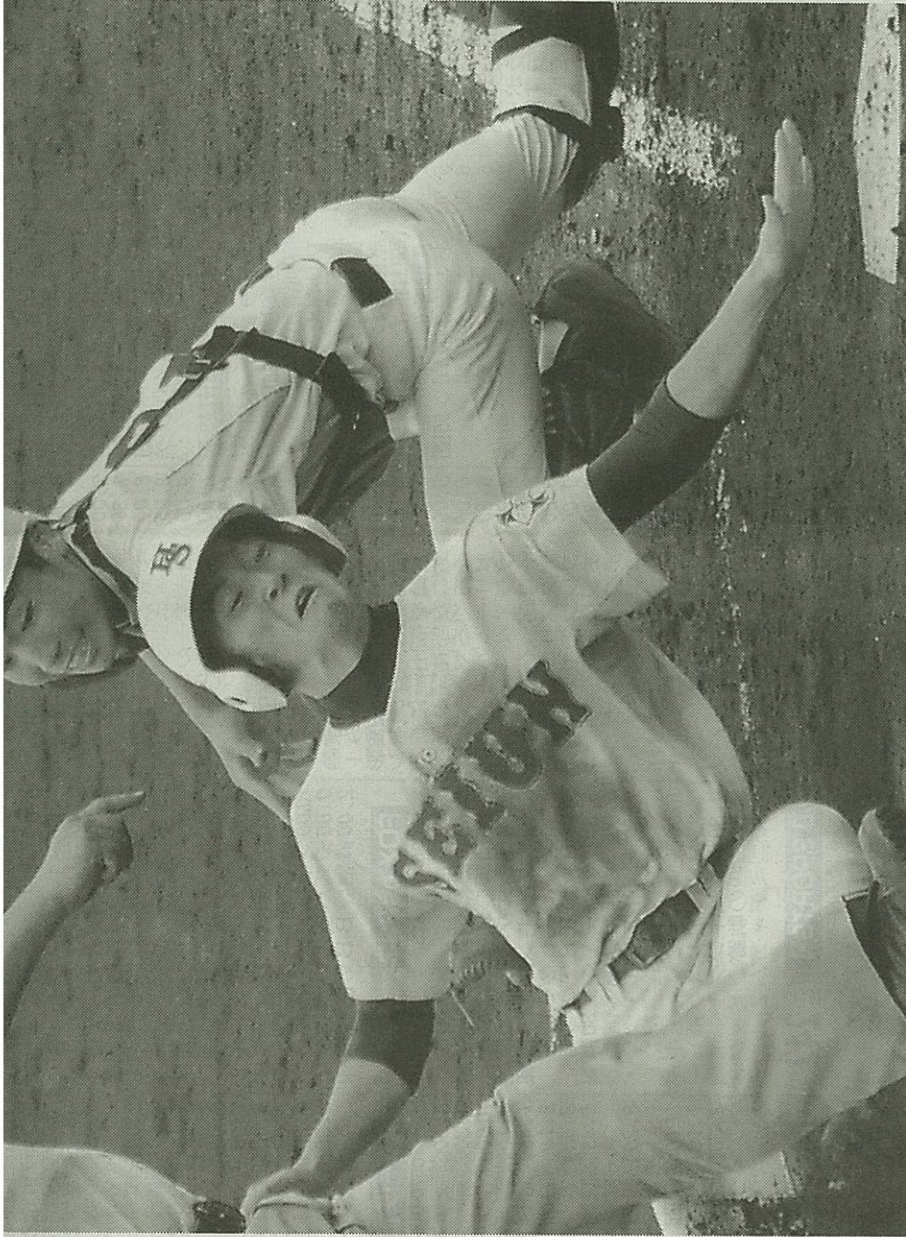
7回以降は、連投の疲れで腕が上がりなくなった。カーブやフォークでもカウントが取れず、肩に余計な力が入って7回に適時打を許した。だが、「決めに行くんじゃない。いいボールを投げるんだ」と自分に言い聞かせた。守備陣も矢策なしで晴山を支えた。

9回、1死で降板。沢田監督は「前半はよく耐えた。疲れている中、ゲームをうまく作ってくれた」とたたえた。

6月に黒沢匠士の練習試合の際の球速は138キロ。昨秋は124キロだった。速い球を投げるために、体重をいったん16キロ絞った後、ご飯を1日6杯食べ、「筋肉だけ」7キロ増やして肉体改造。この冬、右人差し指の爪がはがれ、投げ込みができなかった時は「1日10キロ以上も走らわかんないくらい走った」。

次の試合は15日。登板すれば3連投になる。「切り替えて、また一から組み立てていく意識で投げたい」

(田淵繁樹)



久慈一花北青雲 1回裏花北青雲2死三塁、伊藤の中前通打で三塁走者久保田が生還し、先制。捕手晴山＝県営

久慈	10	10	0	1	1	3
花北青雲	6	3	0	0	0	0

朝日新聞平成24年7月15日付
 ※この記事・写真は朝日新聞社の
 許諾を得て転載しています